

★読書会『悪循環の現象学』長谷正人,1991,ハーベスト社
☆社会学専攻 五十嵐潤

0. 問いかけ

なぜハゲは禿るのでしょうか？

なぜありのままの自分を認めてもらえないのか？

なぜマルクスの学説ははずれたのか？

なぜ不眠症に陥るのか？

ある目的に向かって努力すればするほどかえって目的から遠ざかってしまう現象→これらはみんな「意図せざる結果」と呼ばれている!!

これが悪循環的に反復されて病理にまで発展することもある。

この本曰く、この悪循環の解決策は「毒をもって毒を制す」

1. 「行為の意図せざる結果」とは何か

ある「意図」を持ってなされた「行為」が、その「意図」とは相反する「結果」をもたらしてしまう、という構造を持った現象のこと。EX)象を追い払う男

①「行為」自体がその「行為」の「意図」の達成を拒んでいる、という構造を持ったもの。

②行為者でも観察者でもない視点からによってのみ見つけることができる。

③非常にユーモラスである。

しかしこの現象は心理・コミュニケーション・社会まで様々なレベルで起こりうる。対策はそのレベルの応じて行えばよい。

R・K・マートンが初めて提起した現象。二つに分類される。

・自己成就的予言(self-fulfilling prophecy)

自己成就的予言(self-fulfilling prophecy)

=「最初の誤った状況の規定が新しい行動を呼び起こし、その行動が当初の誤った考えを真実なものとする」EX) 銀行の取り付け騒動、黒人の労組スト破り、家事をやらない旦那、出来損ないの生徒、コミュ障、

つまり、彼らはある事柄を回避しようとして、逆にその回避行動によって回避すべき事柄を起こしてしまったと言える!!

→嘘の予言が予言の影響で真実になること

・自己破壊的予言(self-defeating prophecy)

自己破壊的予言(self-defeating prophecy)

=この予言がなされることによって「もし予言がなされなかったらたどったであろうコースから人間行動を外させ、その結果予言の真実さが証明されなくなる」ような社会現象EX) 穴場情報、自然遺産、非難パニック、不眠症

つまり、予言自体が社会現象の新たな要因として加わったために予言された内容が実現されなくなってしまった。予言が予言を外させている!!

自然に進行していくべき社会現象に対して、予言を介入させたり、意識的なコントロールを行おうとしたために起こるもの。

→真実の予言が予言の影響で嘘になること

・科学的問い

社会科学の観察、実験や結果公表もまた、このメカニズムに組み込まれてしまう。「問題行動」を研究するという行為がその対象に与える影響を無視すると、その行為によって実験やその結果に影響を与えてしまう。

E X)生産量の予測、マルクスの学説、E・メイヨーのホーソン実験、株価暴落の予想、選挙予測のバンドワゴン効果(近年、アンダードック効果は見られにくいと思う。)

必要な立場は、「観察者=行為者」という立場。

(これは現象学的社会学の立場。質的調査ではこれは鉄則!!)

・「問題行動」と「偽解決」

とにかく共通していえることは、「問題行動」に「偽解決」で対処すると、その「偽解決」がさらなる「問題行動」を生むということ。そしてこれが悪循環に陥ると「病理」になる。

必ずしも「行為の意図せざる結果」が悪循環に陥るとは限らない!!!!

資料 p20-29

2. 病理としての「行為の意図せざる結果」

・「自己言及性のパラドックス」とは、

=言明内容が言明自身に適用されるときに、自身を否定して言明を無意味にしてしまうこと。E X)「自発的になれ」「俺を尊敬しろ」「私は嘘をついている」「人は人なのだから」

・「行為の意図せざる結果」の見方を変えると、

=言明それ自体の意味(content)と他者に伝えられた際に生じる意味(relationship)が矛盾し、行為が言明を否定しているとも考えられる。

つまり、言明内容は論理的に矛盾していなくても、コミュニケーションのレベルでは結果的に矛盾が生じてしまうのだ。

・ダブル・バインド論(double bind theory)G. ベイトソンによる

=コミュニケーション上で行為と行為、行為と言動、言動と言動のメッセージが矛盾する場合、これらが与えられた者はその二つの選択肢のどちらもが許されなくなる。矛盾するメッセージに二重に拘束される状態。家族療法理論の原型。

E X)「自発的になりなさい」、「私をリードして」、分裂病、DV

※構成要件 論理的パラドクス 関係性 システム

①主張されるメッセージとそのメッセージに対する主張が矛盾している。＝「自己言及性のパラドクス」②関係が濃密であり当事者にとって必須である。③メッセージの受け手はこれから逃れられない。(＝「バブルバインド」)④メッセージの受け手は特定のこの関係を一般世界の原理だと普遍化して社会に適応しようとする。⑤これにより受け手は逆説的な行動をさせられるが、この反応が相手にも逆説的な行動をさせることになり、循環する。→これが「病理」である。

3. 解決方法

・V. フランクル：彼の神経症の分類はR. K. マートンの「行為の意図せざる結果」と同じであり、理論を応用することができる。フランクルはこの現象に解決策を提示した。

EX)不安神経症と強迫性障害

症状処方(prescription of the symptom)

=医者患者が恐れている当の症状を意図的に起こそうとするように指示する。医者が出す逆説的な指示。

・家族療法 P. ワツラウィックがこれに応用した。

=精神病を抱えた個人を患者として治療するのではない。「家族とその相互作用そのものが『病人』であり、個人の家族成員はむしろやんだシステムの症状である」として、家族のコミュニケーションを治療する。病理への対処に用いられる。

つまり、個人の心理病はそれを維持する病理的な「システム」が原因。さらに、観察者＝行為者としてこのシステムを見ないと気付かない。資料 p79-87,103-110

-cf) 「状況の中にある人(person-in-his-situation)」

・システム論的考え方

逸脱増幅的相互因果過程(deviation-amplifying mutual causal process)=偶発的な発端の始動を増幅させ、逸脱を積み重ね、当初の状態から遠ざかる相互因果関係の過程

EX)反抗期、傷ついた車、ポイ捨て

→変化する悪循環 「行為の～」をシステム内から見たとき

逸脱解消的相互因果過程(deviation-counteracting mutual causal process)=システムの平衡状態から逸脱するような動きを抑制し、システムの秩序を維持するメカニズム

EX)ホメオスタシス、

→変化がなくて冗長性がある 〃をシステム外から見たとき

以上のようにシステムには自身を変化させるメカニズムと固定させるメカニズムのどちらもが存在し、これを維持している。

・毒をもって毒をせいす

治療者(家族療法家)は①「治療者—患者」というシステムを治療する。②「観察者=行為者」として自分を位置づける。

家族療法家は「行為の意図せざる結果」の冗長性を解くために、維持でなく変化のメカニズムに切り替えられるように働きかける。

しかし、患者は変化のメカニズムを持っているがゆえに、「変化したい」「治したい」「解決させたい」という「意図」がある。

なので、治療者はこの「意図」が矛盾した「結果」を引き起こさないように注意しながら、この「意図」を利用して治療する。

資料 p103-110

・特徴

特徴1. 決して「正しい解決策」は言わずに、むしろその「症状」をもっとひどくするような指示を出し、患者本来の「自己治癒力」を引き出させる。

EX)喧嘩する兄弟に「本気で殴れ」と指示する。

特徴2. 治療者—患者間は「治す—治される」という関係であると信頼してもらい、関係レベルで発せられる「治れ」というメッセージと共に、「治るな」という言語内容を指示する。こうすることで、患者は治るための一貫として「症状」を引き出すことができる。

EX) 不眠症患者に恐怖なく眠れない状態でいさせる。

特徴3. 「自己破壊的予言」を使って治療している。

EX) コミュ症に「堂々と恥をかいてもいい」と助言すると、挙動不審がだいぶ落ち着き、以前よりも恥をかかない。

☆大事なこと☆

治療者の「治るな」という指示は、「治してくれる」という関係の内容に内包されていること!!!つまり信頼関係が大事!

4. まとめ

なにか問題が生じたときに、それを治そうという「意図」は誰しもどこかで湧き上がるだろう。でもそのための手段が誤った「偽解決」であれば、その解決自体によって問題を引き起こすという「意図せざる結果」が待っている。

この結果を受けて再び「偽解決」をとれば、再び「意図せざる結果」を引き起こすという「悪循環」になり「病的」と言える。

ここから脱するためには、信頼できる「治してくれる」相手から、「症状」を出すように指示される必要がある。この解決手段こそ「行為の意図せざる結果」なのだ。

5. おまけ

「誤った」能動性：身体に内在された経験知(暗黙知)は無意識レベルで形式化されない知識だったが、僕たちはこれを使って日々生活している。しかし、これを意図的に行おうとすると経験地が発揮されず、むしろできていたことができにくくなってしまう。

EX)ムカデの話

「脱制度化」：規範や価値観に疑問も持たずに従って暮らしているが、いざそれが懐疑の対象となると、個々が自由に選択できるようになり、ルールに自然となじめなくなること。

EX) 自由からの逃走(エーリッヒ・フロム)、呪術からの開放、合理性の非合理(マックス・ウェーバー)

『紋切型辞典』より

6. 引用文献

長谷正人(1991)『悪循環の現象学-「行為の意図せざる結果」をめぐって』、ハーベスト出版

井村圭壯、谷川和昭(2007)『社会福祉援助の基本体系』、勁草書房、p127-128

フローベール(2000)『紋切型辞典』、小倉考誠訳、岩波文庫

7. 推薦文献

①土井隆義(2008)『友だち地獄 - 「空気」を読む世代のサバイバル』、筑摩書房

②内藤朝雄(2001)『いじめの社会理論』、柏書房

③マルク・R・アンスパック(2012)『悪循環と好循環』、杉山光信訳、新評論

④伊藤公雄編(2010)『コミュニケーション社会学入門』世界思想社

※備考

①「自分らしくなること」のパラドックスが中心。この悪循環がもたらす社会病理を掘り下げている。

②個人の心理(phyico)とコミュニケーションという社会関係(social)のダイナミックを接合した IPS 理論を紹介している。これこそ観察=行為者の理論！！

③これは人類学・贈与論・経済学に関する本。この本のサブタイトルは「相手も同じ事をするという前提で」。単なる観察科学ではない、新しい社会学の視点。

④これはコミュニケーション一般理論の教科書。心理学も触れている。